

11月9日（日）主日礼拝レジュメ

「迫害の中に現れるみわざ」 使徒の働き5章17～26節

4章2, 3節では、「イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていることに苛立ち、二人に手をかけて捕らえた」のですが、17節では、ねたみに燃えたからだということです。それと同時に17節では留置場に入れることまでしています。彼らのねたみの原因は、使徒たちがサドカイ派の言うことを聞こうとしないのに、多くのしるしと不思議を行い、そして民衆も使徒たちを支持して、主を信じる者たちがますます増えていったことである。

「彼らを公の留置場に入れた」とは、使徒たちが捕えられたことが周りにはっきり分かるようにしたということ。このことにより、この者たちは信用するに値しない者たちだ、この者たちの言うことを信用してはいけないと人々に思わせようとしたという意味もあるだろうし、もし使徒たちの味方になれば、同じ目にあうことを示そうとしたのだろう。それは、最高法院の者たちは自分たちの権威を示そうとしたとも言える。

19節で、主はご自分の使いを遣わし、使徒たちを牢から連れ出した。人が考えられないような方法で主なる神は使徒たちを助け出された。まさに主のみわざ。カニンガムという学者が、「迫害は人と神とのつながりを強くし、迫害を通して主はご自分の民とともにおられることを表す。」と言った。迫害は主のみわざを表す機会をご自分の民に与える時と言える。神はどんな状況の中にあっても、必ずみこころのままにみわざをなしてくださる。しかし、7章でステパノは助け出されず、石を投げつけられることで絶命し、12章でヤコブはヘロデ王により剣で殺されました。そしてパウロも主のみわざにより牢から助け出されることはなかった。彼らが助け出されなかった理由は分からない。しかし、一つだけ分かることは、主の使いは「行っ

て宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい。」と使徒たちになすべき務めを与えていますが、このことのために牢から助け出された。そして21節で彼らはその主の使いによって示されたことばに応答し、従った。彼らは決して人を恐れず、主を恐れて、主にのみ従おうとした。喜んで福音を受け入れる人ばかりではなく、自分の意に反する目に遭うこともある。使徒たちが主のわざを行っていたために、捕えられ留置場に入れられたことは、私たちにとっても大きな誘惑となりえる。しかし、逆に使徒たちの姿からすれば、主のみこころに従っているから使徒たちは苦難を受けたとも言える。しかし、みこころに従い、神の召しに歩むならば、どんな苦難があったとしても、神はその状況から救い出してくださると信じることができる。その信仰により神以外の何ものをも恐れず、生きていくことができるようにされる。

20節「いのちのことば」=救いのメッセージ。特に、イエスキリストの信仰による救い。主はいのちのことばを宮の中に立ち、人々、すなわちユダヤ人に語りなさいと言われた。イエスキリストを拒み、彼を十字架につけた者たち、キリストを受け入れることを拒み続ける者たち、使徒たちを捕え、留置場に入れる人たちに対して、神はいのちのことば、救いのメッセージを語ることを決してやめようとはせず、決して彼らをあきらめない、捨てようとはされない。使徒たちもいのちのことばをすべて宮で語った。そこに、神のみこころの一つとなって生きる使徒たちの姿がある。私たちも、主のみこころと一つになって生きる者たちでありたい。